

平成16年度「岩手・生と死を考える会」活動報告

中村一基*・千田 浩**

(2005年2月8日受理)

はじめに

「岩手・生と死を考える会」が産声を上げて16ヶ月が経とうとしている。中村・千田の二人で始めた会も、よちよち歩きの感はあるが、学生・市民・教育現場の教員など13名ほどの会になった(平成17年1月現在)。

平成15年度の「岩手・生と死を考える会」活動報告(『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第3号、2004)において、定期的な活動として毎週土曜日の学習会の継続をあげているが、後述するように、実際にはお互いの可能なスケジュールを調整しながら、毎月2回程度がやっとだった。だが、会は継続してきた。今後も同じようなペースかもしれないが、継続していくつもりだ。学習会の会場を、途中から教育学部から図書館に移した。そのことで、市民のみなさんには参加しやすくなったと思う。今後も図書館の演習室を活用していきたいと思う。

また、同報告において、2004年から年間のテーマを設定して活動したい、ということ述べているが、これはうまく行かなかった。一応〈余命〉というテーマを考えしたが、一年をこのテーマのみでまとめるには、あまりにも会員の関心が多様だったからである。

ただ、この一年間、様々な「生と死を考える」集まりにおいて、共通の言葉が課題として浮上してきたように感じる。それは、「スピリチュアルペイン」に対しての「スピリチュアルケア」という言葉である。そのことは、本会が所属している「生と死を考える会全国協議会」の代表者会議(3月13日・14日)での講演の演題が、後述するように「パストラルケアとスピリチュアルケア」「悲嘆ケアのためのスピリチュアルケアについて」であり、8月20日・21日上越教育大学を会場にして行われた、上越教育大学いのちの教育を考える会主催の「平成16年度第5回「いのちの教育」実践のための研修講座」のテーマが「豊かないのちを考える～スピリチュアル・ケアとスピリチュアル・エデュケーション～」ということからも伺えよう。これから、ますます〈スピリチュアリティ〉というキーワードが「生と死を考える」場合に重要になってくるように思われる。

1、会設立後の活動

平成15年10月に設立した「岩手・生と死を考える会」(岩手県教育研究ネットワーク加盟。代表中村一基、事務局千田 浩。会員数13名)であるが、その後の活動を報告したい。基本的に例会を、岩手大学図書館4Fグループ演習室において、毎月2回程度土曜日の14:00～15:30の1時間半の時間帯で行っている。また、代表中村を始めとして、各会員が様々な研究会等に参加し、死生観を深めて

*岩手大学教育学部教授 **岩手大学教育研究科2年、岩手県立黒沢尻北高等学校教諭

いる。千田は「東京・生と死を考える会」主催「『死への準備教育』研究会実践講座第3回夏期セミナー」（平成16年7月24日・25日）に参加した。また、本会が所属する「生と死を考える会全国協議会」（会長 高木慶子英知大学教授）には中村が参加し、現在の活動状況を報告した（「生と死を考える会全国協議会」2004年度全国大会 in 豊橋。平成16年10月23日・24日）。会員は後述の活動報告からも理解していただけると思うが、全国的な「生と死をめぐる」教育の現状を知り、例会の中でも報告し合い、理解を深めている。

2、平成15年度「岩手・生と死を考える会」活動一覧

- 第1回：平成15年10月7日（火）「設立準備会」
- 第2回：平成15年10月25日（土）「老齡擬似体験」（担当：千田 浩）
- 第3回：平成15年11月1日（土）「グリーンワーク」（担当：佐々木 恵）
- 第4回：平成15年11月8日（土）「墓と葬式」（担当：中村一基）
- 第5回：平成15年11月15日（土）「黄昏の、神隠しの森へ」（中村一基、文学講座、盛岡市立図書館集会室）
- 第6回：平成15年11月29日（土）「ペットロス」（担当：本館佐妃）
- 第7回：平成15年12月13日（土）「満足死」（担当：芳賀久美）
- 第8回：平成16年1月20日（火）「平成16年度の活動計画」
- 第9回：平成16年2月14日（土）「最近の新聞記事から気づいたこと」（担当：中村一基）
- 第10回：平成16年2月21日（土）「アポートシス」（担当：千田 浩）
- 第11回：平成16年3月6日（土）「代理母出産」（担当：佐々木 恵）

3、平成16年度「岩手・生と死を考える会」の活動報告

平成16年4月から平成17年1月までの「岩手・生と死を考える会」活動報告である。

第1回（2004／4／10・通算12回）

* 「生と死を考える会全国協議会の動向」（担当：千田 浩）

「生と死を考える会全国協議会」とは、死への準備教育・ホスピス運動の発展・死別体験者のわかちあいの場づくりという3つの活動目標を持って、人間の生と死について様々な面から考え、学び、活動している全国組織です。この全国組織には、現在50団体（平成16年3月現在）が会員として加盟している。3月13日・14日、2003年度「生と死を考える会全国協議会」代表者会議が、事務局のある英知大学において開かれ、中村と千田が参加した。

「生と死を考える会全国協議会」代表者会議報告

日時：平成16年3月13日（土）～14日（日）

会場：英知大学（〒661-8530兵庫県尼崎市若王寺2-18-1）タワー10階

3／13 14：00～15：30

講演① 水野治太郎氏（副会長、麗澤大学外国語学部長）「日本人の死生観」

「自己決定権の範囲についての議論はない、若い医者は説明抜きで、自己決定権のみ重視するケースも多いのが問題。自己決定権は合理的過ぎるのでは、割り切りすぎる、曖昧さの容認、私には決定できないというのも一つの立場であろう。医療の日進月歩によって、ホスピスの理念も問い直しの必要—出入り自由のホスピスでなければならない。」

15:45~17:45 代表者会議

18:00~ 懇親会

3/14 9:00~9:45

講演② 松本信愛氏（事務局長、英知大学教授）「パストラルケアとスピリチュアルケア」

「パストラルケア Pastor（羊飼）羊を狼から守るために自分の身体を賭ける—教会関係では昔から使われてきた言葉である。

Pastoral Care ホスピス（修道院で疲れた旅人をお世話する）キリスト教的→公的 緩和ケア病棟
 スピリチュアルケア Spiritual Care 1998年WHO理事会 健康の定義—身体的・精神的・社会的・
 （4番目）スピリチュアル 1999年5月総会 教会関係はなじみがあるが、一般の人たちはピンとこ
 ない 3月・4月厚生科学審議会 広義 人間=肉と霊（紙の裏と表）霊的生活・霊性・魂・その人
 自身—鍛えるためにお祈り・瞑想」

10:00~12:00 講演③ 高木慶子氏（会長、英知大学教授）

「悲嘆ケアのためのスピリチュアルケアについて」

「パストラルケア」という言葉は、日本では使わないほうがいい。教会内部だけで留めて欲しい。「スピリチュアルケア」=全人的 「死を想う」ことは大切なことである。

第一に、人生の最期にそれまでの自分の人生を肯定できるために、

第二に、「私が自分の生を過ごすために多くの方々に協力していただいた、支援していただいた、ありがとうございました」という言葉と、

第三に、そのためにはいろいろご迷惑をおかけいたしました、「ごめんなさいね」「許してくださいね」という言葉を周囲の方々に申し上げることができるために。」

第2回（2004/4/17・通算13回）

*「自爆テロ」（担当：藤原 司）

「自爆テロと聞くと、その理由がわからない狂気の沙汰であるとか、命を大切にしなすぎるなどといったコメントをよく見かける。私はそれらを否定するつもりはまったくない。しかし、自爆テロについて語る場合に、私は簡単に自爆テロを否定してはならない部分を感じる。否定することは否定するのだが、その場合に単純に相手側を責めることはしてはならない。自爆テロを行うような人々の気持ちを私は分からないでもないと思う。そのことを分かった上でどのように自爆テロを否定していくのか。それが問題であろう。自爆テロを簡単に否定してはならないというその理由のもっとも大きなものは、正義の問題である。」（レジュメより）

第3回 (2004/5/8・通算14回)

- * 「岩大生の就職活動」(担当:本館佐妃) <中村研究室4年生>

就職活動と生きがいについて、自己の体験に基づき語った。

- * 飯田史彦『生きがいの教室』紹介 (PHP研究所、2004) (担当:千田 浩)

「飯田史彦氏は、福島大学経済学部の助教授であり、人事管理論を担当する先生です。人間の価値観や「生きがい」を研究する経営心理学者です。しかし、氏は「生きがい論」の提唱者としての方が有名でもあります。」(レジュメより)

～飯田氏の提唱する「生きがい」とは何か。ブレイクスルー思考。「生きがい」論の七つの特徴。「生きがい」論の活用方法。～

第4回 (2004/5/15・通算15回)

- * 「単為発生」(担当:芳賀久美) <中村研究室4年生>

～生命操作・再生医学の可能性～

- 1、卵子だけでマウス誕生に成功…読売新聞 2004年4月22日

◆ 単為発生=卵が精子なしに、化学的な刺激などで分裂を始め、個体を発生する生殖法。昆虫や魚類、両生類、鳥類では、特別な操作をせずに自然状態でも観察される。アリやミツバチは、単為発生でオスを、受精でメスを産み分ける。

- 2、民法・刑法にみる<胎児>

- 3、ヒト受精胚、胎児について

第5回 (2004/6/12・通算16回)

- * 「生前葬」(担当:鈴木泰子) <岩手県立盛岡北高等学校教諭>

テーマ① 「死」に関する個人内態度分析の試み(1)

テーマ② 「生前葬」(資料「朝日新聞」2004・5・8「生前葬ってどうやるの?」)

今後の話題提供のために! 「生と死を考えるキーワード50」

第6回 (2004/7/3・通算17回)

- * 「長崎小6殺害事件」(担当:千田 浩)

※資料①「御手洗怜美さん(12)の父親の手記」(「毎日新聞」平成16年6月8日)。

「親の思いを大切にしたい。再び悲劇を繰り返さないようにするための努力がわれわれに必要である。「さっちゃんはいない、それが分からない」何度読んでも、胸に迫ってくる手記である。」(レジュメより)

※資料②「<心の教育>どこへ」(「朝日新聞」平成16年6月27日)。

「何かしなければならぬ。でも何をしたらいいのかわからない。」一率直な感想。対処療法と同時に新しいモラルの育成が大切なのでは?改めて、心は意図的に教育できるものなのだろうか? 道徳教育の可能性は?」(同)

※資料③「教育現場とインターネット」(「河北新報」平成16年6月13日)。

「子供たちが分からない」と考えるより、「ネットが分からない」から問題だと考える方が心理的負担が少ないため、ネット悪玉論が登場。現代という社会の中での、子ども達の変化は大きい。子どもは社会の反映であり、ミニチュアか?? あるいは、小さな大人、それとも大人そのものか??

ネット自体も大きな闇であり、善意も悪意もあらゆるものを包括し、膨張を続けている迷路(迷宮)かもしれない。」(同)

※資料④「親に何ができるのか」「前思春期の危うい女心」(「A E R A」平成16年6月14日号 No 26)。

「女の子の暴力体験の増加。プチ化粧。

「女の子のトラブルの多くは嫉妬がもとなる。男の子より言葉が豊かなので、言葉による復讐に走りやすい。」「パソコン教育と言うけれども、親や教師に気づかれない世界を、お金を出して与えているのです。」「子どもの様子を把握した上で、内面には介入しない」(久保教諭)「内面に介入しない」という対応でいいのか? 教師自身が傷つかないためでもあるかもしれない。危ういのは「前思春期」「思春期」だけではない。「中高年の危機」?? リストラ・年金不安、確実なものが見つからない時代、投げ所にするものが見つからない。危うさは、人間の持つ本能であり、アイデンティティ??」

(同)

※資料⑤「小6同級生殺人 流された犯人の『顔と自宅』写真」(「週刊現代」平成16年6月26日号)。

「かつてこれほどまでに、世間に素顔を知られてしまった少年事件の加害者がいたのだろうか。更生の方向性は進むのか? 受け皿の整備。家族の行方。」(同)

※ 資料⑥教育「言葉の乱れと存在感なき教師」(狭山ヶ丘高校長 小川義男)(「産経新聞」平成16年6月27日)。

「言葉の荒れ」→事故を予見することが可能か? 言葉は、思考の表れ。教師のできることを模索。」

(同)

※ 資料⑦教育ふぁいる「佐世保・小6事件 全国の小学校は…」(「読賣新聞」平成16年6月28日)。

「事件から7月1日で、1ヶ月。事件の再発防止策を探る学校現場の取り組み。

命の尊さ・大切さを全員で考える授業。「ネチケット」と呼ばれるネット上でのマナーを指導する動き。テキストの作成。そのテキストを使った授業。教員がメールをチェック。家庭でのインターネット利用状況調査。凶器になったカッターナイフの校内持込を禁止。」(同)

第7回 (2004/7/10・通算18回)

* 「誕生は生まれ変わりなのか?」(担当:中村一基)

- ◆ 誕生は生まれ変わりなのか? すべての者は生まれ変わるのか?⇒子ども観。
- ◆ 生まれ変わりの事実を知ること、何が変わるのだろうか?⇒死生観。人生観。
- ◆ 死をめぐる前世の記憶は、我々に何をもたらすのだろうか?⇒不可解な恐怖、精神的なトラウマからの解放(前世療法)。
- ◆ 愛する故人(子どもなど)の生まれ変わりの事実を知ること、彼らを喪った悲嘆は癒されるだろうか?⇒グリーフケア。

第8回 (2004/8/5・通算19回) 夏期セミナー

* 「ドラマに見る死生観」(担当:千田 浩)

※ 「僕の生きる道」(脚本・橋部敦子。2003年1月から3月放送)。

「このドラマを通して、「いのちが限られる」という苦しみの中でも、人は強く生き続けることができるという命題を考えていくことができます。」(レジュメより)

《参考》小澤竹俊『苦しみの中でも幸せは見つかる』（扶桑社、2004）

～ドラマ「僕の生きる道」から何を読み取るのか？→ 関係性。～

「人の心の中で生き続ける～大切な人との関係性は、時間や空間を超えて生き続けます。」

※「ラストプレゼント～娘と生きる最後の夏～」(脚本・秦 建日子)。

「あと3ヶ月しか生きられないとしたらあなたは何をしますか？」

主人公・明日香—バツイチ。かつて、結婚生活と娘を捨て、一人で生きる道を選んだ。36歳の今…余命三ヶ月と宣告された。自分勝手と言われても、どうしてもしなければいけない事がある。「もう一度、娘と仲良くなりたい！」しかし、娘のそばには、「新しい母親」になる人がいた—。彼女は、自分の余命のことを誰にも言わない。それが娘を捨てたことへの『つぐない』 ひとりの女性としての『プライド』

娘への思いを胸に、彼女の最後の夏がはじまる…。(レジュメより)

* 「スピリチュアル・ケア論の現在」(担当：中村一基)

※問題と課題

- ①死の受容と死後の希望
- ②スピリチュアルな痛みはどう応えるか。
- ③スピリチュアル・ケアと宗教ケアと精神的・心理的ケアの違い

※WHO「健康の定義」	—————▶	ターミナル・ケア 看取り
1 身体的	—————▶	1 身体的
2 心理的	—————▶	2 精神的
3 社会的	—————▶	3 社会的
4 スピリチュアル		4 スピリチュアル 魂の痛み
		5 宗教的

※新井満「千の風になって」の紹介

- 1 本当の意味で死んでいない → 光 アニミズム 死生観
- 2 人間以外の他の存在 生まれ変わり

第9回 (2004/9/4・通算20回)

* 「自殺はどうしていけないのか。」(担当：藤原 司) (「岩手哲学学会」での発表要約)。

構成 はじめに

- 第1章 自殺容認論
 - 1) リベラリズム
 - 2) リベラリズムに基づく自殺の条件
- 第2章 自殺反対論
 - 1) 他人への迷惑
 - 2) パターナリズム
 - 3) モラリズム
- 第3章 検討

* 「模擬授業（仮）」（担当：千田 浩）

「学校における生命倫理教育ネットワーク」編著『総合的な学習 こう展開するの教育』（清水書院、2000）を使い、「生と死の教育」の枠組みを考えようと言う試み。

* 「かけがえのない生命の尊重」

「東京・生と死を考える会」の夏期セミナー「いのちの教育」実践のための研修会で参観した宮内浩二教諭（千葉県・市川市立第三中学校）の「忘れられないご馳走」という授業の追試。

第10回（2004／9／25・通算21回）

* 「＜日本ホスピスケア・在宅ケア研究会第12回福島大会＞報告」（担当：中村一基）

9月11日

- ・【特別講演】山折哲雄「東北の看取りと死生観」
- ・【記念講演】柳田邦男「死が生に語りかけてくれることー人生最大の課題をかんがえるー」
- ・【対談】鎌田實&山崎章郎「『いのち』を語る」

9月12日

- ・【基調講演】高木慶子「いのちこの神秘なるもの」
- ・【特別講演】日野原重明「いのちを考えるー私とあなた、わたしとそれー」

第11回（2004／10／9・通算22回）「死への準備教育」（担当：中村研究室2年生）

* 「学校教育における『生と死の教育』」（担当：鈴木忠志）

- ・小・中・高等学校の授業の中でどのように「生と死の教育」が行われているかについて触れる。人間の結末である「死」について様々な角度から真剣に考える必要性について考えた。

* 「『死』を学ぶ子どもたち」（種村エイ子）（担当：宮まゆみ）

- ・日本で、「死の教育」の必要性が注目され始めたのは、1971年キューブラー・ロスの『死の瞬間』が翻訳され、死に直面している患者の心理分析が話題になって以降である。
- ・「私達は、入試や就職というような人生の重要な試練に臨む前には、必ず教育や訓練によって準備を整えるのに、人生最大の試練である『死』になんの準備もしないで臨むのは酷ではないか。」（アルフォンス・デーケン）
- ・「子どもへのデス・エデュケーションは、本来なら各家庭でのペットの死や祖父母の死などの機会に両親から行われたり、学校での性教育と平行して、エイズ教育やデス・エデュケーションがなされるべきであって、それが成されて始めてかけがえのない命を考えるようになります。」（山花郁子）。

* 「岩手のホスピス」（担当：平野美沙子）

- ・現在、岩手にはホスピス等の緩和ケアの為の専門施設がない。全国にホスピスがない県は岩手を含め、山梨、奈良、鳥根の四県だけとなっている。そこで、平成14年12月4日に、がん患者とその家族・医療従事者を中心として約70名により「岩手にホスピス設置を願う会」が設立した（盛岡市肴町杜陵老人福祉センター）。この願う会は、痛みや不安に苦しむ患者さんを救うために、県内に一日も早くホスピス等の緩和ケア施設を設置して欲しいとの思いで設立した。県内において、どこでも、誰でも希望する医療を平等に受けられることを強く望み、これから岩手に一日も早く数多くのホスピスが出来、一人でも多くの方が苦しみから解放されることを

願いながら活動している。

第12回 (2004/10/30・通算23回)

* 「江國香織の死生観」への取り組みの動機・目的 (卒業研究: 「江國香織研究～生と死をめぐる～」から)

(担当: 佐々木 恵) <中村研究室4年生>

「はじめに

I 研究の動機

卒業論文の方向性を決める初めの段階では、「江國香織」についての研究は候補になかった。その代わりに、初めからずっと候補にあったのが「生と死」というテーマである。幼い頃に親族や肉親を亡くした経験がある私にとって、「死」はとても身近なものであり、一度突き詰めてじっくり考えてみたいことであった。「江國香織」の作品を単なる趣味としてではなく研究の対象として意識したのは、彼女の作品の中で「生きること」・「死ぬこと」を題材に取り入れた場面や小説が数多いことに気付いたことがきっかけだった。今になって思うと、初めて読んだ「デューク」という短編小説も愛犬との死別の物語であった。そこで「生と死」というテーマを研究してみたいという想いはずっと変わらずにあったので、興味がある二つのテーマを融合させて形で卒業研究を進めることに至った。

II 研究の目的

多くの現代人は、「死」を意識することなく日々を生きている。

単に忘れているという意味で「意識していない」というよりも、「意識したくない」という深層心理がそうさせている、と言い換えるほうが正しいかもしれない。「死」が持つイメージを人々に問いかけたならば、大抵の人々が「怖い」・「悲しい」などのマイナスのイメージを列挙するであろう。「死」とは命の終焉であり、意識や肉体という自己の消滅である。それは時に恐怖や苦痛を伴うものかもしれない。それならば、できることなら「死」という恐怖や不安を体験したくないと誰もが思うものである。あるいは「自分だけは…」と見ないふりをして、「死」を遠ざけたいと思うものである。しかし、「死」は確かに自分の身近に存在している。

現代の日本では医療の発達や核家族の増加、メディアの規制等も影響して、実際に死体を目にする機会が少なくなった。つまり「死」を身近に感じる機会が減ったのだ。もともと「死」は存在自体が曖昧である。はっきりとした形があるわけではないし、その存在を明確化しようにも、生きている人間にとって「死」は経験不可能な現象なのである。自分が生きている間に経験できるのは他人の「死」のみであって、その経験を通して人間はいずれ自分にも訪ねる「死」を感じるのである。

このように「死」を目にする経験の機会が減少し、さらには、時間に追われるめまぐるしい日常を生きる中で、「死」を想いながら生きることは難しいことかもしれない。しかし、「死」は誰にでもいつか必ず訪れるものであって、逃げることは不可能である。また「死」は予告もなしに突然やってくるものである。だからこそ、現代人はもっと「死」を想いながら生きるべきではないだろうか。「死」を身近な問題として捉え、そして「生」と「死」の意味を探求し、自覚を持って自他の「死」を備えること。これは近年必要が叫ばれている「死への準備教育」の理念である。「死への準備教育」に触れることで、「死」を意識し、自分の生きる時間が限られていることを自覚する。そして、人生の大切さをあらためて認識し、残された時間をより真剣に生きようとするという。つまり「死

への準備教育」とは「よりよく生きるための教育」と言い換えることができる。私が言わんとしていることは、まさに「死への準備教育」の理念そのものである。本研究においては、第一に「江國香織」の作品を通して彼女自身の死生観を考察し、さらに、どう「死」を迎えるべきなのか、つまりそれまでどう生きるべきなのかという、双方の視点からの「生きること」・「死ぬこと」の本質について考察を進めたい。またよりよく生きるために「死」と向き合うことを提案していきたい。」
(レジュメより)

* 「〈生と死を考える会全国協議会 in 豊橋〉報告」(担当：中村一基)

10月23日(土)

- ・【基調講演】高木慶子「改めて生と死を考えることの必要性」
- ・【講演 I】日野原重明「末期患者から学ぶ＝死に心をあわせた患者さんへの追想」

10月24日(日)

- ・【教育講演】高木慶子「いのちの教育」
- ・【講演 II】佐藤 健「ホスピスの似合う街、私たちのホスピス運動の歩み」
- ・【講演 III】徳永 進「あの世に自転車こいで」

第13回(2004/11/13・通算24回)

* 「〈日本ホスピスケア・在宅ケア研究会第12回福島大会〉報告(2)」(担当：千田 浩)

* 「離魂病について」(担当：千田 浩)

「ドイツ語圏〈ドッペルゲンガー(二重身)(二重分身)〉→出現…その人物の死の前兆

英米圏 〈ダブル double〉

中国 〈離魂〉または〈離魂病〉

【離魂】71 リコン 身を離れた魂。旅人の夢中の魂。

【離魂記】72 リコンキ 小説の名。一卷。唐、陳元祐撰。

【離魂女】73 リコンヂョ 離魂倩女をいふ。

【離魂病】74 li² huen² ping⁴ 睡眠したまま起き出でて或る動作を行ひ、目ざめた後其の事を些かも知らない一種の精神病。夢遊病。

【離魂倩女】75 魂の離れている倩女。唐の王宙と倩女との故事。

(諸橋轍次『大漢和辞典 卷十一』大修館書店、昭和34年8月30日、p.1045)

井波律子氏によれば、「洋の東西を問わず、ドッペルゲンガー(分身)は、小説の重要なモチーフの一つである。唐代伝奇(唐代に書かれた短編小説)の「離魂記」(陳元祐^{りこんき}作)は、とりわけ美しく分身の夢を描いた物語だと言える。」(井波律子『くあじあブックス〉中国幻想ものがたり』大修館書店、2000年、p.14)ということである。

日本では 〈分身〉〈影法師〉〈影の病〉〈影の煩い〉

かげの病(やまい・びょう) 「かげ(影)煩(わずらい)」に同じ。

かげの煩(わずらい) 熱病の一種。高熱を發した病人の姿が二つに見え、どちらが本体でどちらが影かわからなくなるという。影の病。影。かげのやまい。離魂病。

(日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典 第二版 第三卷』小学館、2001. 3. 20、p. 484)」(レジュメより)

* 「全国協議会支部紹介① (東京・生と死を考える会)」(担当：千田 浩)

第14回 (2004/11/20・通算25回)

* 「仏教ホスピスにおけるビハーラ僧の役割」(担当：樋口日出子)

〔1〕 仏教ホスピス：長岡西ビハーラ病棟の概要

ビハーラとは、インドの経典に使われているサンスクリット語で「休養の場所、気晴らしをすること、僧院、寺院」という意味がある。飯田女子短期大学教授の田宮仁は、仏教を背景として、終末期の人たちに尊厳を持って最後の時を過ごしてもらおう施設をビハーラと呼ぶことを提唱し、1992年にわが国で初めての仏教ホスピス：ビハーラ病棟を長岡西病院5階に開設した。(略) そこでは、約70人の超宗派の僧が集まり、「仏教ビハーラの会」を設置した。

2) ビハーラ僧とは

3) ビハーラ僧侶の役割の実際

患者と関わる時は、ほとんど仏教の話はしない。自分からはしないが、たまに聞かれた時に答える程度である。日頃大切にしている考えは、仏教での「生老病死」である。(略) 仏教言葉で「生老病死」を語るのではなく、身体を使って現場(臨床)に足を運び、生身の人間と触れ合いながら、患者やご家族と共に悩み苦しみを共有するよう関わっている。

4) ビハーラ病棟看護師の役割

日頃、この病棟で働く看護師は、特にスピリチュアルケアについて、意識して実践はしていないが、患者のペースにあったケアの提供を目標に看護している。患者のその時々ニーズを把握し、患者中心の全人的ケアを実践することは、スピリチュアルケアに繋がっているのである。(レジュメより)

* 「全国協議会支部紹介② (群馬ホスピスケア研究会)」(担当：千田 浩)

第15回 (2004/12/4・通算26回)

「NHK大学セミナー2004 立花隆に学ぶ『人間の能力とその可能性』」(主催：NHK盛岡放送局 & 岩手大学、企画：岩手大学大学教育センター)を会員受講。

第16回 (2004/12/11・通算27回)

* 「バラ色の人生! 明るい往生!」16:00~17:00 (宮古市教育委員会・財団法人岩手教育文化センター主催「平成16年度宮古市社会経験者大学」での講演「バラ色の人生! 明るい往生!」の紹介) (担当：中村一基)

《バラ色の人生!》

※ これまでの人生は〈バラ色〉でしたか? 今は〈バラ色〉ですか?

※ 浦島太郎の人生は? 玉手箱を開けて300歳。→太宰治〈忘却〉は慈悲。

《65歳からの、「バラ色の人生」のために》(永六輔『大往生』『二度目の大往生』【表紙OHP】より。岩波新書、200万部)

- ※ 北山修 (～オラは死にじまっただあ。天国いいとこ一度はおいで、酒はうまいし、姉ちゃんは綺麗だ～「帰ってきたヨッパライ」。フォーククルセイダーズ。現在、九州大学の精神科の医者。)

「忘れなければ新しいことを覚えられない。だから、忘れることを怖がっちゃいけません。どんどん忘れなさい。その分、新しいことが覚えられるから。」(二度目)

- ※ 永六輔の注

「忘れていくときは技術が必要。いやなことをどんどん忘れて、楽しいことだけを憶えている人は人生がとても明るいが、いやなことばかり憶えていると、ああ私の人生はなんて暗いんだろう、ということになってしまう。忘れ方上手になろう。」

- ※ 「〈つらい〉とか〈悲しい〉とか〈痛い〉というのは何とかできるんです。一番やっかいなのは〈むなしい〉ということ」(二度目)

- ※ 永六輔の注

「自分が誰かの役に立っているという自信がある人は絶対に虚しくならない。〈虚しさ〉を感じない暮しというのが、充実した暮らした。」

- ※ 「老人になったときに、見せるべきものを持っているか。語るべきものを持っているか。伝えるべきものを持っているか。語るべきものを持っているか。伝えるべきものを持っているのか。このうち、一つでも持っていればいいのです。」(二度目)

- ※ 「歳をとったら女房の悪口を言っちゃいけません。ひたすら、感謝する。これは愛情じゃありません。生きる智慧です。」(大往生)

- ※ 「旦那は定年後のことをいろいろ考えているんだけど、私は未亡人になってからのことを考えているの。」(大往生)⇒いつでも夢を!

- ※ 「しなやか、したたか、つややか。この三つ、これが長持ちするコツだすな」(大往生)

《明るい往生!》

- ※ みなさんの思い描く「明るい往生!」とは?
- ※ 最期を迎えたとき「素晴らしい人生だったな」「悔いのない人生だったな」と思って逝ける人生。「笑って大往生」出きる人生!⇒ {涅槃図}【OHP】
- ※ 健康でポックリと逝ける。老衰死=自然死。天寿を全うする。
- ※ 「死は自然現象です。」(『モリー先生の最終講義』「死ぬこと、生きること」)

《往生と死》

- ※ 往生と死とは、実は同じではない。
- ※ 往生とは「往って生まれる」。どこに? 「あの世」(極楽、浄土、天国…)?
- ※ 「あの世に往く」「あの世からお迎えがくる」⇒「どの世」と聞く者はいない。「ああ、あの世ね!」<宮古にも「あの世」がある。浄土が浜!>
- ※ {弥陀来迎図}【OHP】⇒お迎えの原風景。浄土教。厭離穢土・欣求浄土。
- ※ 「善人なおもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。」(親鸞『歎異抄』)阿弥陀仏の絶対的慈悲。⇒奇瑞(香り・音楽・紫煙)
- ※ 「御陀仏」「成仏」を<死>の意味で使う日本人。仏教的中身は消失。
- ※ みんなが知っているんですね。「あの世」に行くことを。日本人の宗教意識。

《65歳からの「明るい往生！」のために》(永六輔『大往生』『二度目の大往生』より)

- ※ 「死んだっていうからおかしいんだよ。先に行っただけなんだから。」(大往生)
- ※ 「死ぬっていうことは、あの世というか、親のところへ行くって感じだと思います。」
- ※ 「死ぬのは淋しいっていったらさ。医者がああ世には先に行っている御主人が待っていますっていうんだよ。私ア、あの亭主とは二度と逢いたくないんだ。」(大往生)
- ※ 「当人が死んじゃったということに気がついていないのが、大往生だろうね」(同)

《お墓と葬儀に往生する》

- ※ 【里山・棚田を見渡すお墓OHP】お墓の原風景。
- ※ 「夫婦は同じお墓に入る必要はない？」【OHP】⇒4割そう思う。「偕老同穴」は男の夢か！
- ※ 自分の葬儀をしてほしいですか？⇒【朝日OHP】「してほしい。56%」「してほしくない。44%」テーマ「葬送」⇒「遺骨は墓以外に。4割」
- ※ 〈墓参り〉をする人はいますか？⇒【お墓参りは8割が行きながら、高まる「自然葬」願望OHP】
- ※ お墓は必要。⇒「生者」中心。死者の死を納得する場。気持ちの収めどころ。自分のルーツの視覚的確認。死者を思い出す装置。
- ※ 家族の変容！〈無縁墓〉の増加！
 - (1) 都市の過密化、農村の過疎化。⇒無縁墓の増加と改葬問題。
 - (2) 核家族化の進行、少子化の進展。⇒墓地不足と無縁墓の増加。
 - (3) 離婚・未婚者の増加。⇒
 - (4) 高齢人口の増加。⇒墓地需要の増大と供給の停滞
 - (5) 家意識の稀薄化。⇒〈墓参り〉意識の低下。

《お墓と葬送のゆくえ》

- ※ 3つの願い！を叶えたい。⇒①「あの世ではせめて」②「自分らしく」③「こどもに迷惑かけたくない。」
 - (1) 納骨堂の増加⇒ドーム型。仏壇型ロッカー式。永代供養。【OHP】
 - (2) 共同墓の出現⇒血縁単位によらない。墓の無縁化・個人化に対応。
 - (3) 墓地のリサイクル⇒墓地使用の有限化。一定期間後、合葬。
 - (4) 樹木葬⇒遺骨を山林に埋め、墓標として植樹する。自然回帰・自然保護【OHP】
 - (5) 自然葬(散骨)⇒遺骨を粉末状にして散布する。墓地の無形化。【OHP】
 - (6) 生前葬⇒「子どもの負担減も目的」「社会的関係にも区切りも」「人生の一区切り」【OHP】

《お墓と環境》

- ※ 【生活と環境OHP】
- ※ 「ときどき亭主の骨をかき回してやっています。」「好きな男の骨なんだもの。忍びないですよ。一番いいところにしまって、ときどきはかき回しています。骨にさわって、話しかけるの。」(『二度目の大往生』)⇒住井すゑさんのことば。御主人の墓をつくらず、書斎のタンスのなかに遺骨をしまっている。
- ※ 詩「千の風になって」朗読【OHP】。

《辞世のことば・ベスト3》

- ※ 第3位：「つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを」(『伊勢物語』業

平に擬された主人公の辞世。無常観。恐れではなく悲しみ。極楽往生を願う歌ではない。)【OHP】。

- ※ 第2位：「願はくは花の下にて春死なんそのきさらぎの望月のころ」(60代半ばの西行く亡くなる10年ほど前)が、「こういうふうになりたい」(死に場所・死ぬ時期)と願って詠んだ歌。極楽往生を願う歌ではない。(西行は、歌通りの死に方をして、当時の人々に驚きを与えた。おそらく、死期を悟り、断食行をしたのではいか。)【OHP】

- ※ 第1位：「散る桜残る桜も散る桜」(良寛、74歳、辞世の句)【OHP】

「うらを見せ表を見せて散る紅葉」「倒るれば倒るるままの庭の草」(73歳)

《日本人の死生観》

- ※ 大いなるもの(宇宙・自然)に帰る安らぎ。⇒自然回帰。「おのずから形而上学」(相良亨)
- ※ 「死の哲学的なイメージは、〈宇宙〉の中へ入って行き、そこにしばらくとどまり、次第に融けながら消えてゆくことである。(略)〈宇宙〉のなかへ「入る」またはそこへ「帰る」感情は多くの日本人に共通だろうと想像される。」(加藤周一『日本人の死生観』下)
- ※ 「この旅は自然に帰る旅である。」(高見順『死の淵より』)【OHP】《「自然法爾」と「明るい往生」》
- ※ 五木寛之『元気～人はみな元気に生まれ、元気の海に還る～』【OHP】。
⇒「〈死〉とは〈いのち〉の帰還である。「たましいの故郷」としての「元気の海」への帰還である。」〈新しい浄土の物語〉。
- ※ 「元気」⇒「天地万物を生み出し、それを生かしているエネルギーの根源が《元気》というもの。《元気》の中から、私たちはこの世界に送りだされてきた、と私は想像する。」五木寛之『元気』⇒親鸞「自然法爾」に通じる。
- ※ 親鸞「自然法爾」⇒「往生なるものは〈行者のはからい〉、すなわち〈自力〉によってなるものではなく、〈如来によってしからしめるもの〉である。〈如来のはからい〉によるものである。」(相良亨『日本人の心』第8章 おのずから)自然(じねん)とは「自然」の「いのち」。
- ※ 親鸞「自然法爾」⇒「自分が宇宙万物の一部として生み出され、生かされていることを実感し、それを感謝する。」(五木寛之『元気』)【OHP】
- ※ 「そのことをはっきり実感して生きることこそ、元気に行き、元気に死ぬ、ただ一つの道なのかもしれない。」(五木『元気』)⇒「元気の海」を観想する。⇒《バラ色の人生、明るい往生》を可能にする。死後の安心。

《65歳からの選択基準》

- ※ 【寸陰愛惜】(吉田兼好『徒然草』)【OHP】「一刹那に生きるのが元気の条件。」(五木)⇒「積極的〈刹那主義〉」
- ※ 「こだわりを捨て、日々を楽しむ。」「今が一番楽しいと言えますか?」⇒楽しさが学ぶ極意! 「積極的〈快樂主義〉」

《実践》

- ※ 【生涯現役】(仕事)と【隠居】(趣味・ボランティア)。⇒「生きがい」
- ※ 【諸縁放下】(『徒然草』)と【仲間作り】。⇒60歳過ぎたら「自由に生きる」
- ※ 93歳の日野原重明さんの主張。「新老人運動」75歳から。【OHP】
① 愛し愛されること ② 耐えること ③ 新しいことを始める。

《まとめ》

- ※ 自分が一番心地よい〈物語〉に身をゆだねてください。
- ※ 全ての人生は受け容れられています！」(レジュメより)

* 「今年度回顧と来年度の展望」(担当：千田 浩)

* 「全国協議会支部紹介③」(兵庫・生と死を考える会) (担当：千田 浩)

17:30~19:30 忘年会 (於：竹樫山房)

第17回 (2005/1/29・通算28回)

- * 「生と死の教育」(12月21日・22日実施「岩手県教職員10年経験者研修」《総合的学習》での講座「生と死から学ぶいのちの教育」(担当：中村一基) の内容紹介) (担当：中村一基・千田 浩)

4、今後の活動について

本会が所属する「生と死を考える会全国協議会」の活動目標が「死への準備教育・ホスピス運動の発展・死別体験者のわかちあいの場づくり」の3つであることは既に報告しているが、「岩手・生と死を考える会」の今後の活動は、それらの活動目標を意識しながらも、設立時の場の設定としては、「(1) 教育現場における『生と死の教育』『死への準備教育』についての学習の場とする。(2) 生涯学習の一環としての上記の教育について、総合的に学ぶ場とする。(3) 『総合演習』(中村担当)の発展の形も取る。」と定めており、最終的には岩手の教育現場に根ざした「生と死の教育」プログラムの開発作成を目指している。

岩手の教育現場に根ざした「生と死の教育」プログラム作りに向けては、「岩手県教職員10年経験者研修」《総合的学習》での講座「生と死から学ぶいのちの教育」が、その意志表明となったような気がする。平成17年度は教育学部と附属との共同研究会に「いのちの教育」でエントリーする予定である。そして、すでに本会に参加している教師とともに全国の動向を見据えながら、岩手の教育現場に根ざした「生と死の教育」プログラムの作成、さらに実践を目指したいと思う。なお、市民のみなさん・学生を主とした生涯学習の一環としての本会の活動に関しては、全国の「生と死を考える会」の動向も踏まえながら、今後の方向性を模索していきたい。